

一遊星人の願い

「遊・星・人」が昨年発行されてから丁度一回りしてよいよ第二ラウンドに入りました。私も惑星に興味を持つものとして日本惑星科学会に入会し、これを読んでいますが、編集委員会の皆様のご努力でなかなかの読み物だと思います。私は現在東海大学工学部の航空宇宙学科に籍を置いていますので惑星について学生に話をする事もあり、JGRのE号と共に必読の書とも言うべきものになっています。特に私にとっては火星、地球、金星がなんとも魅惑的な遊星です。マゼランのSARによって初めて見る事が出来るようになった金星の姿等には本当に興奮させられました。

話は変わりますが1990年2月米国のブッシュ大統領がSEIと言う計画を提唱し2019年迄に人間を火星に送り込むと宣言した事を思い出します。当時は東西冷戦も終結し米国はソ連の協力を得て人類の進むべきニューフロンティアとして先ず火星を目指そうとしたのです。宇宙技術の目覚ましい発展を基にして、かつてアポロ計画で人間が月面に下り立った年から50年後に我々の隣の惑星に新たに人類の足跡を印そうと言う企てでした。米国の科学者がこの計画に参意を示したか否かは別として、まだそれ程不況が顕在化していない事もあり新しい友?と一緒に国際的なリーダーシップを保持していこうとする極めて政治的な発想のように思いました。当然の結果として有人火星飛行の問題が宇宙先進国の中で広く議論され、宇宙技術関係の学会で大きく取り上げられるようになりました。火星に人間を送るためには現在の技術を基にした10年・20年の新技術の開発のために膨大な人的・経済的資源を必要としますし、更に最低5-6年はかかる実施期間中の安定な政治的環境が必要でしょう。現在の世界情勢はこれ等を満たしているようには思われません。果たして過日有人火星飛行計画は中止すると言う発表がありました。更に日・欧を巻き込んだスペースステーション計画をも縮小しようとしてパートナー達を困らせています。私にはこれらの経緯は丁度我々の経験したバブル現象そっくりのものであったような気がします。宇宙はバブル構造をしていると言われていますが、こんなバブルは御免です。

さて星に遊ぶ我々としてはこれ等の星をとことんまで調べたいと思います。特に火星や金星は我々の地球と兄弟星ですので、地球が現在何故人類も含めて生命に満ち溢れた一見特別な惑星になったのかと言うことを探るためにも大変興味があります。ブッシュさんが月の次に火星を目指したのも大変尤もな事です。私も最終的には人間が行って調べなければならないと思っていますが、地球上では既に極めて多種多様な生命体が発達しているのでこれを持ち込んで火星の上で蔓延させる前に火星をあらゆる点から調べておかなければならないのです。さもないと生命も含めた太陽系形成のシナリオを描き出すと言う大命題の追及を台無しにしてしまうでしょう。その為にこれ等の惑星の探査は先ず無人探査機を用いて徹底的に行う必要がありますが、もし着陸させて観測をさせる場合には差し当たりその探査機が地球上の生命体やそれに由来する有機物を持ち込まないようにしなければなりません。その為に探査機を完全に無菌・消毒の状態を送り出さなければならぬので、これも容

易なことではないでしょう。しかしそれこそやるしかないのです。しかも最も有効な方法と規模で行うこと、それが我々の使命でしょう。

火星を改造して第二の地球とすることを考えている人々もいますが、果たしてそれによって人類が幸福になれるのでしょうか。技術的には壮大な実験として興味のある問題でしょうが、この様な火星に移住すると言うような人類の未来に大きく関係することも惑星科学会の皆さんで議論される事はいかがでしょうか。

我が国でも飛翔体による惑星探査が実現のものとなりつつあります。この様な太陽系の起源と進化を追求する企てが無理する事なく着実に足元を見据えつつ人類の幸福に繋がるよう進められる事を願っております。

東海大学工学部・平尾 邦雄